

## ガラス産業を取り巻く競争環境について



経済産業省住宅産業窯業建材課長

三橋 敏宏

Mitsuhashi Toshihiro

本年 6 月 25 日に住宅産業窯業建材課長に着任いたしました三橋敏宏と申します。これまでの経済産業行政のご支援、ご協力に感謝を申し上げますとともに、今後本フォーラムでご尽力されています皆様のために力を尽くしていきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

着任しましてから、国内のガラスメーカーの工場のいくつかを訪問し、生産現場を見させていただくとともに、現在の競争環境について多くの方からお話を伺いました。何よりも最初に強く印象に残りましたのは、通常の建築用の板ガラス、あるいは自動車用のガラス、液晶などより高い品質が求められるガラス、そして特定の用途向けの高機能ガラスのいずれの分野におきましても、日本企業が、売上あるいは世界市場の中でのシェアにおいて、有意な地位を占めているということです。

一方で、エネルギー多消費産業として、現在の円高やエネルギー制約という非常に大きな課題に加え、欧州の金融危機をはじめとして、世界経済全体の見通しが不透明になっていることの影響も非常に大きく、重いものであることを実感しました。

特に、円高が急速に進展して以降、従来の組み立て（川下）産業のみならず、ガラスなど部材・素材産業の海外への生産拠点の移転計画が進み、国内産業の空洞化の懸念も肌に伝わる感覚として私に伝わっています。

こうした大変厳しい競争環境を「ただ待つ」だけでない視点で見ていただくことはできないでしょうか。例えば、「円高」1 つをとりましても、輸出という視点で見ますと、日本で生産した商品を輸出する際には大変厳しいものですが、逆に、海外の優良な資産を取得するという一面に注目すれば、チャンスとも受け取ることが可能ではないでしょうか。

いわゆる六重苦の課題全てについて、それぞれの課題を裏返しにしたメリットとすることは難しいかもしれませんが、欧州資金が引き上げるような市場において、優良な資産を手放す者がいるという意味で、チャンスが落ちている可能性は十分あると思います。もちろん行政もやるべきこと、できることが多々あると思っています。

さて、我が国のガラス産業の国際企業化が進む中で、ニューガラスフォーラムは、政府が支援する研究開発の中心としての役割、そして、そこで得た知見が、研究開発に参画した企業が国際展開する際に、国内工場が技術面でマザー工場の機能を果たす上で重要となる知見の集積の機能を果たしてきていると承知しています。27年前に設立されて以降、これまで、高性能なデバイスを高速かつ低コストで作製できる「三次元光デバイス高効率製造技術」や、本年度終了予定のガラスの製造工程において多大なエネルギーを消費する溶融炉の省エネ化を実現する「革新的ガラス溶融プロセス技術」など、産業の根底を支える重要な技術開発を実施してきました。これらの技術開発は、いずれも実用化（製品化）がイメージされるものです。技術を競争力の源泉とする企業において、基盤となる技術、そして実用面でも最先端の技術開発の重要性を強く認識しており、政府としても、今後とも引き続き支援を行っていきたいと考えています。

特に、「革新的ガラス溶融プロセス」の開発は本年度終了予定であり、本フォーラムの今後の役割と機能についても、研究開発の実施主体から次の段階に、あるいはそのウイングをさらに伸ばしていくことが必要となっています。もちろん、新たな技術開発テーマにチャンレンジしていくことも有望な選択肢の1つではありますが、これまで培ってきた日本のガラス関連企業が技術的知見を共有してきた場の今後のあり方や、有効な活用のために役立つ本フォーラムのあり方についても、関係者と相談して参りたいと考えています。

最後になりますが、ニューガラスフォーラムの技術開発を含む様々な取組が、目下の課題である世界そして日本の省エネ化社会をリードし、我が国のガラス産業の国際競争力強化につながることを期待し、ガラス産業関係者及びニューガラスフォーラムの皆様の更なるご活躍を祈念いたします。